

STYLING

MONO

ピーコートと言えばアメリカ、
という連想がなされがちだが、
実はアメリカ海軍が
ユニフォームとしてピーコートを
採用したのは19世紀後半。
ヨーロッパ各国の海軍に倣って
導入されたのであった。



VOL.41 P-Coat SINCE 18th century~

●[ピーコート]

Photo / Tomoaki Tsuruda (WPP)

WPP Archives

Text / Teruhiko Doi (WPP)



Photo / National Archives

海軍用の防寒コートである

『ピーコート』は、

いまや多くのアパレルが

独自のデザインで

ラインナップに加えている。

しかし、どれだけ大胆な

デザインを施しても、

ピーコートのスタイルに

大きな変化は見られない。

18世紀に誕生し、

19世紀になって現在の形に

なったときから、

そのデザインは完成されていた

のである。

水先案内人を英訳すると

「PILOT」となるが、

その頭文字をとって

その名が付いたとか、

あるいはオランダ語の

「修道服」に当たる言葉の

頭文字からそう呼ばれるように

なったなどなど、

ピーコートに名前の由来は

定かではない。

ヒップ丈のダブルブレスト

というスタイルは、

海軍や船乗りだけではなく、

学校指定のスクールコートや

ファッションの定番として、

すっかり定着しているのである。

オーソドックスだけど

コーデイナーに困らない

ピーコートの魅力について

探っていくことにしよう。

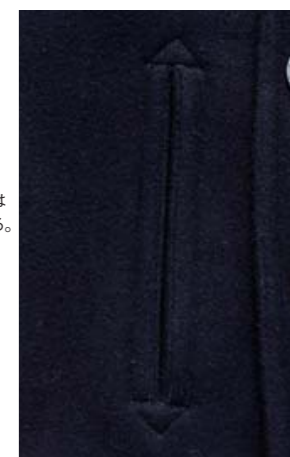
STYLING

MONO

1910年代のピーコートの特徴は
 高密度の分厚いメルトンウール素材で
 あること、アメリカの国章を表す
 13個の星が刻印されたアンカーボタンが
 付くこと。この13個の星は、1777年の
 アメリカ合衆国独立時の州の数に13で
 あったことに由来している。



大型の襟は海上で作業する際に
 襟を立てて顔を覆うための
 防寒・強風対策のためのデザイン。



縦にスリットが入ったポケットは
 ハンドウォーマーとして機能する。



ピーコートを語る上で欠かせないのが
 「ネイバルクロージングファクトリー」の存在。
 これはニューヨーク・ブルックリンにあった
 ネイバルヤード内のクロージングファクトリー
 のことで、アメリカ海軍が作戦を展開するために
 必要となる物資を補給する兵站部で、
 ピーコートは生産されていたのである。

設立は1898年。後にカリフォルニアの
 ネイバルヤードでも生産は行われた。
 したがって「ネイバルクロージング」は
 ブランド名ではなく、「官製」という意味。
 このページで紹介しているピーコートは
 アメリカ海軍が下士官用のコートとして採用した
 1910年代のものの複製版である。



ベントの裏側も丁寧な縫製。
 裏地はレーヨン製のサテン地が
 採用されている。



何重にもミシンが掛けられた裾の裏側。
 長年使っても糸がほつれたりしない、丈夫な
 作りがミリタリークロージングならではの。

STYLING

MONO



イギリス海軍に倣ったアメリカ海軍のピーコートには厳格な仕様書があり「コートに使うボタンはファウルアンカーにすること」となっていたそうだ。ファウルアンカーとは、鎖やロープが絡まった錨のマークのことで、ピーコートといえばこのボタンである。



Photo / US Navy

文献によるとヨーロッパでは1720年頃には「ピーイエッケル」という、船員や漁師が着用するウェアがあったらしい。19世紀に入ると、その機能に目をつけた海軍が多少の手直しをして「ピーコート」が生まれた。ヨーロッパ各国の海軍やアメリカ海軍が水兵用の防寒着として導入し、海軍ユニフォームとしてのイメージが定着していく。そのスタイルはヒップ丈でダブルブレスト(両前あわせ)のウールコートで、錨のマークが入った大型のボタンを使用。襟は開襟と折り襟の両方で使用できるコンバーチブル式。サイドにハンドウォーマーのポケットが付く、という基本デザインだった。いまとほとんど変わらないデザインである。

このコートが一般に普及したのは第二次世界大戦後。放出品として大量のピーコートが出回った。何しろ、戦時中のアメリカ海軍の生産力は非常に高く、ブルックリンにあったネイバルクロージングファクトリーでは、1942年

当時で1日に1万4000着以上のユニフォームを製造する能力があったという。ピーコートに限れば、生地に水を通して行う防縮加工も含めて、1日に700着を縫い上げたからロープを太くしてデザインのパランスを取ったものもある。また、第一次世界大戦当時のフラップ付きのウエストポケットもその後は廃止され、着丈も徐々に短くなって

ピーコートの歴史。

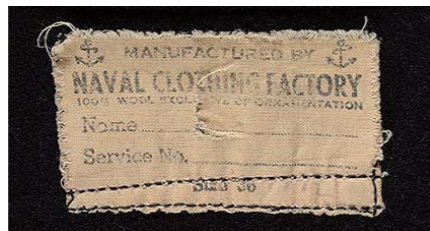
という数字が残っている。余剰で生産された莫大な量のピーコートが終戦と同時に放出されたわけだから、一般への普及も早かったと推察される。同時に、一部は囚人の防寒作業服としても使用されていた。映画の中でもそれは確認できる。クリント・イーストウッドの「アルカトラスからの脱出(1979年)」で、イーストウッドを始め何人かの囚人が着用している。

しかし、デザインがまったく変わっていない部分もあり、それが大きな襟の部分。防寒・防風の機能を持たせた大きな襟は欠かせないものであり、コンバーチブルカラーであることもピーコートの定義になっている観がある。襟止めのボタンは決して飾りではなく、重要な意味を持つものなのである。

伝統的なものもあるのだが、アメリカ海軍は非常にスタイルに敏感な軍服を作り続けている。泥まみれの陸軍とは違い、立ち姿さえも規範がある。ピーコートにもそれはあって、胸で着ることが伝統になっているのだそうだ。



1940年代のネームラベル



1910年代のネームラベル



1920年代のネームラベル



着用者の名前と階級が記されている。1940年代



ステンシルされた軍の管理番号



1930年代のネームラベル



ブルックリンのネイバルヤード内に置かれたクロージングファクトリーでピーコートを製造している様子を捉えた貴重な記録写真。最終点検の作業風景か。Photo / WPP Archives

STYLING

MONO

バスリクソンスのピーコートに
ついてのお問い合わせは
向東洋エンタープライズ
☎03-3632-2321
<http://www.toyo-enterprise.co.jp>

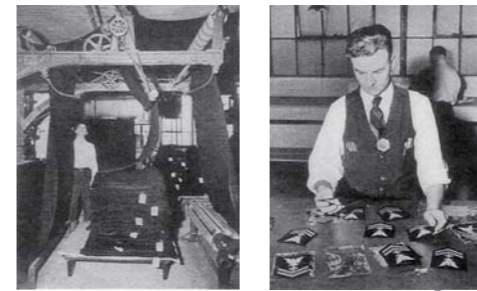


Photo / WPP Archives



NAVAL CLOTHING FACTORY Type PEA COAT

1910年代の古き良きピーコートを再現した一着。クラシカルな13スターボタンや厚手のメルトンウールなど、徹底的にこだわった作り。定番のワードローブとして一着は持っていたいもの。
価格5万1450円

ファウルアンカー(からみ錨)ボタンはそれぞれの国によってデザインが異なる。しかし、国は違えど、ロープが絡まった錨のマークというのが同じなのは、面白い発見だ。



USA



France



E.Germany